

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 富山県立魚津工業高等学校 教諭 富岡 政裕
- 2 研修期間 令和5年8月29日(火)～令和5年9月6日(水) 9日間
- 3 調査研究課題 ヨーロッパ諸国の教育視察による、主体性を身に付けるための教育環境及び望ましい職業教育の在り方に関する調査研究
- 4 研修機関等
ドイツ : ミュンヘン市教育・スポーツ局 在ミュンヘン日本国総領事館
オストヴェルテンベルク商工会議所アーレントレーニングセンター
Zeiss 本社
デンマーク : ホイデバングェンス学校 ガメルヘレロップ高校
在デンマーク日本国大使館

5 研修の概要

(1) ドイツの職業教育事情と社会情勢について

ミュンヘン市の職業教育学校のための国際教育コーディネートを担当されているシュミットさんより、ミュンヘンにおける職業教育のシステムと現状について説明を受けた。

ドイツでは、小学4年生にあたる年に受けるテストの成績により、大学を目指すギムナジウムへの進学か、職業教育を受ける実科学校または、基幹学校への進学を選択して振り分けられる。職業教育系の学校では、デュアルシステムが採用されており、日本の職業教育とはシステムが大きく異なる。職業学校における職業訓練では、企業による研修が7割、専門学校で理論を学ぶ時間が3割となっており、学生は自ら訓練を受ける企業を探す必要がある。また、約7割の学生が体験先の企業へそのまま就職する。このシステムは、地域の商工会議所とそこに所属する企業が密接に関わっており、ミュンヘン市では有力企業であるBMWの影響力が非常に大きい。BMWで体験をする学生は特別なクラスに所属しており、企業から実習用機材やパソコンなどの提供もあるとのことであった。

このシステムにも近年は課題がいくつかあり、そのうちの1つは、体験先の募集が埋まらないことや、学生の体験先が決まらないことである。原因としては、学生の学力不足やドイツ語を話せないこと、モチベーションが不足していることなどが挙げられる。これは移民が増えてきていることにも大きく関係している。対策として、16歳以上の移民が通う特別な専門学校を創設し、これはデュアルシステムに組み込むために言語スキルを向上させることを目的としている。

その他に、職業高校の教員不足も課題であり、広報活動に力を入れているとのことであった。

(2) マイスター制度と職業訓練について

アーレントレーニングセンターにて、商工会議所の役割と、マイスター制度について説明を受け、その後 Zeiss 社における職業訓練の説明を受け、施設を見学させていただいた。

ドイツの商工会議所 (IHK) は、企業の支援や、技術者向けの基礎、応用の訓練を担っており、主にマイスター認定のためのトレーニングについてお話を伺った。製造業に所属している社員が、マイスター資格を得るために、3.5年の訓練を働きながら受け、現場での経験を含めて最短4.5年で認定のための試験を受けることができる。マイスターに認定された社員は、企業での現場責任者の地位に就き、組織づくりや製造改善、品質管理、若手社員教育の責任者となり、製造業を支える存在となる。訓練設備はとて素晴らしいで、NC装置を備えた新しい工作機械が充実しており、ロボットと組み合わせた実践的なトレーニングを行える機械も備わっていた。



次に光学系技術で世界的に有名な Zeiss 社を訪問し、デュアルシステムにおける職業訓練についての説明を受け、専用の訓練施設を見学させていただいた。IHK のトレーニングセンターにあるような機械設備が多数備わっており、ここで加工技術の基礎を学べるようになっていた。また、Zeiss 社ならではのガラス加工機もあり、訓練の中に組み込まれていた。こちらの施設では、毎年100名程度の訓練生を受け入れおり、3年間の訓練期間があるので、現在300名超の訓練生が在

籍している。訓練生は基礎的訓練に加え、実際の営業活動やプロジェクトに参加し、それぞれの専門性に応じた実践経験を積むことができ、研修手当も支給される。3年間の課程を修了した際には雇用が保証されているが、入社せずに他の研修を受けに行く場合もあるようである。

これらの仕組みから、ドイツの職業教育にはIHK及び企業が主導的役割を担っており、早くから専門的な内容を訓練しているため、入社の際には必要な専門的スキルを身に付けており、会社のことを熟知した上で就職先を決めることになるので、離職率低下に役立っている。

(3) デンマークの教育事情と社会情勢について

デンマークでは日本での中学校段階に相当するホイデバンゲンス学校、高校段階に相当するガメルヘレロップ高校を訪問し、在デンマーク日本国大使館で社会情勢や教育事情について説明を受けた。ホイデバンゲンス学校では芸術の授業の様子と、移民を受け入れている特別なクラスを見学させていただいた。芸術では入学後間もない学生が、手のひらサイズのタイルに自分で決めたデザインを彫刻する内容であった。20名程度の生徒に教員が2名配置されており、生徒は自主的に製作を進めながら、必要があれば教員にアドバイスをもらいに行くような形式であった。

ガメルヘレロップ高校は比較的優秀な生徒と教員が集まってくる学校であり、複数の授業に分散して見学した。私が参観した英語の授業では、英語を教えるというよりは英語を使ってイギリスのテレビドラマを題材に歴史や時代背景などを学び、英語で自分の意見を伝えるといった授業を行っていた。他の授業でも生徒が考えて行動し、生徒が説明をする場面が多かった。

デンマークでは税金が高い代わりに教育にかかる予算の割合が非常に高く、大学まで無償で通うことができる。さらに、大学やその他の学校で資格取得のために学ぶ際には就学支援金をもらうことができ、誰でも働くために学べる環境が整っていると感じた。また、就業後も転職を繰り返すのが当たり前という文化があるようで、キャリアを積みながら自分に合った職を探すという、日本にはあまりない考え方に驚かされた。働き方の面では残業をすることはほとんどなく、なおかつ休暇が多く、金曜の午後は休みをとる人が多いらしい。そのことが起因してか、近年は女性が研究職や法学などの高学歴が必要な職種で活躍する割合がとても高いとのことであった。



(4) 研修を終えて

ドイツとデンマークの教育事情に触れ、日本との考え方の違いや、文化の違いに驚かされることが多くあった。職業教育については、早くから専門性を絞った実践的なスキルを学ぶ教育を行っており、国の産業を支える人を育てるために地域と企業と学校が一体となって教育に関わっていた。一連のシステムには国の明確な教育目標がベースにあり、教育が国をつくるという思いが強く表れていると感じた。日本の高校における職業教育は、高度な専門性は求めるというより、広く浅く学び、学び方や考え方を身に付けて、仕事を選んでから専門性を高めるという流れである。そこにもメリットはあるが、就職後のミスマッチなどの課題があるため、学校と地域や企業が関わり合い、望ましい職業教育を模索する必要があると考える。

また、子供たちの主体性を伸ばす教育について、ドイツ、デンマークともに、子供のころから自分の意見をしっかりと持ち、議論をしてコンセンサスをとるという習慣が教育と家庭環境の中で身に付いているようである。学校においては、授業の中で民主主義や政治と日常生活とのつながりを意識させる内容に触れ、考えを持つことを繰り返し経験させているとのことであった。

これら海外における教育の特色は、日本にも取り入るべきだと思うが、真似をすることで失われる日本の良さもあるのではないかと感じた。例えば、ヨーロッパでどこへ行っても日本の接客サービスに敵うものはないと感じた。また、病院でいつでも治療を受けられるという当たり前のことも、デンマークでは難しいと伺った。近年、海外の教育手法が取り入れられることが増えてきているが、日本の教育の歴史を振り返りつつ、日本の良い面、海外の参考にすべき点のバランスをとって、明確な理想を持って教育を改革していくことが必要であると感じた。

今回の視察は、世界に目を向けて教育について考える良い機会となった。このような貴重な機会を与えてくださった富山県教育委員会並びに富山経済同友会の皆様に感謝申し上げます。